

私が小学五年生のとき。

「バヌアツの子供たちに、英語で手紙を書きましょう」

担任の先生が突然そんなことを言い出したので、私は驚いた。先生の友達がバヌアツの小学校で教師をしているので、夏休みを利用して会いに行くのだという。その時、現地の子供たちと交流するので、プレゼントとして手紙を持っていこうというのだ。

それから先生は、バヌアツについて、たくさんの写真を使って、色々なことを教えてくれた。バヌアツがたくさんの島から成る国であること。とても暑い国で、主食がおイモであること。そして、『世界で一番幸せな国』と言われていること。

私は不思議に思った。写真で見る限り、バヌアツの人々の生活は、決して豊かには見えない。村に電気は通っておらず、小学校も簡素な建物で、教室には机もイスもない。子供たちは床にぎゅうぎゅうに寝転がって、小さな鉛筆や消しゴムで勉強している。

バヌアツのひと月あたりの収入は、日本の五分の一ほどしかなく、生活が苦しい家庭が多い。そのため、中学校に進学できない子供も多いのだという。

それを聞いて、私はバヌアツの子供たちをかわいそうだと思った。手紙なんて書くよりも、お金を送ってあげた方がいいんじゃないか。いざ画用紙を配られても、何を書けばいいのか分からなかった。仕方なく、あいさつと自分の名前と、「本を読むことが好きです」とだけ書いて、空白をヤシの木の絵で埋めてごまかした。

夏休み明け、バヌアツの子供たちからの返事が来た。開くと、画用紙一面が元気いっばいな文字で埋め尽くされていた。手紙は自己紹介から始まり、『手紙をもらってとても嬉しい、ありがとう』と続いた。ところどころ誤字があり、読めなかった。その子も私と同じで、英語を勉強中なのだと、先生が教えてくれた。海外の子はみんな英語が喋れると思っていたので、私は少し意外に感じると同時に、その子に親近感を覚えた。

手紙の裏には、絵が描かれていた。

それは、本棚の絵だった。なぜ本棚が描いてあるのか、私は不思議に思ったが、ふと手紙に「本を読むことが好き」と書いたことを思い出した。

本棚は立体的に描かれていて、背表紙にも小さく名前が書いてあるという細かさだった。何度も消しゴムを使った跡がある。

私は、思わず笑顔になった。私の手紙を受け取った子は、私が本を読むのが好きだと知って、ぎっしり本が並んだ本棚を描くことで、私を喜ばせようとしてくれたのだろう。

先生が、子供たちの写真を見せてくれた。私の手紙を持っている子は、すぐ見つかった。大きく歯を見せて満面の笑みを浮かべる、かわいい女の子だった。

私はバヌアツの質素な暮らしぶりを見て、本当にバヌアツが『世界一幸せな国』なのか疑った。そして、手紙なんて書いても意味がないのではないか、何か別の実用的な物をあげた方がいいのではないかと、思った。つまり、私は『物の豊かさイコール幸せ』だと、

無意識のうちに思い込んでいたのだ。

ところが、そのバヌアツの女の子は、そんな私の思い込みを吹き飛ばしてくれた。物の豊かさと幸せは、イコールじゃない。相手のことを想い、心を込めて精いっぱい丁寧に書けば、たとえ英語が拙くても、色とりどりのペンがなくても、たった紙切れ一杯で、海を越えて、誰かを幸せにすることができる。

国境を越えた物資援助や技術提供が盛んになりつつある今だからこそ、支援する側も、される側も、相手を思いやる心と、その思いやりを感じとる心を忘れないことが大切だと思う。『世界一幸せな国』から届いた手紙は私に幸せの本質を教えてくれた。